SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

No. 101
MARCH 27
2015

国際交流

留学生との交流会「国際交流の夕べ」
留学生等バス研修旅行

- 新任教員紹介
- 定年教授のあいさつ
- 図書館改修レポート

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
SETA DAYORI
MARCH 27, 2015

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

MARCH 27, 2015

C O N T E N T S

メインテーマ：「国際交流」

トピックス

01 留学生との交流会「国際交流の夕べ」
04 留学生等バス研修旅行

新任教員紹介

06 分子神経科学研究センター（認知症研究分野） 教　授　西　村　正　樹
07 生化学・分子生物学講座（分子生理化学部門） 准教授　寺　田　晃　士
08 放射線医学講座 准教授　新　田　哲　久
09 臨床看護学講座（母性看護学・助産学） 准教授　千　葉　陽　子

定年教授のあいさつ

10 生命科学講座（化学） 教　授　木　村　隆　英
11 解剖学講座（神経形態学部門） 教　授　工　藤　　基

図書館からのお知らせ

12 図書館改修レポート

キャンパスライフ

14 学生の論文が Journal of Investigative Dermatology に掲載されました
医学科第４学年　杉　浦　周　嗣
解剖学講座（生体機能形態学）　教　授　宇田川　　潤
16 学長と学生との懇談会について

アジア疫学研究センター紹介

17 アジア疫学研究センターにおける疫学研究（その２）
アジア疫学研究センター　特任助教　久　松　隆　史

国立病院機構　東近江総合医療センターだより

20 東近江総合医療センターにおける
４年間の実績　総合外科学講座　教　授　来　見　良　誠

インフォメーション

24 第40回若鮎祭収支決算報告

編集後記（宮松編集長）

トピックス

学生との交流会「国際交流の夕べ」

Social Gathering for International Exchange in 2015

平成27年１月21日（水）、本学福利棟食堂において、外国人留学生との交流会「国際交流の夕べ」を開催しました。

交流会には、本学に在籍している外国人留学生、外国人研究者をはじめ、日頃よりご支援をいただいている関係団体、ボランティアの方々、教職員など、総勢90余名が集い、親睦を図りました。

今回は、留学生有志が日本舞踊「黒田節」を披露してくれました。ボランティアの皆様のご協力により実施している日本舞踊教室の成果です。堂々と踊る姿に、会場から惜しみない拍手が送られました。中央のテーブルには、マレーシアの留学生による母国のデザートが並び、大好評を博しました。本学管弦楽団の演奏、留学生も参加した混声合唱団の歌唱も、それぞれに心のこもったものでした。

最後は、参加者全員が「琵琶湖周航の歌」を管弦楽団の伴奏で合唱し、和やかな雰囲気の中、お開きとなりました。

On January 21, a social gathering called "Evening for International Exchange" was held at the Student Center Cafeteria. Over 90 people got together, including our international students and researchers, the delegates from supporting organizations, local volunteers, and SUMS' faculty and staff members. It was a great opportunity for the participants to develop closer relations with each other.

This year, Dhito from Indonesia performed a Japanese classical dance, "Kurodabushi." This was an outcome of the Japanese Culture Class which is organized for our international students and researchers by local volunteers and supporting groups. His magnificent performance was riveting for the audience and was met with great applause.

On the main table, delicious desserts made by the students from Malaysia were lined up, and were eagerly consumed.

Also, participants enjoyed a musical performance by some members of the SUMS Student Orchestra, and a singing performance by members of the SUMS Chorus Club and international students & researchers.

At the end of the party, all participants sang Biwako Shuukoo no Uta (Lake Biwa Boat Cruising Song) together, with played by the SUMS Student Orchestra, which is customary for this annual event. It was an enjoyable evening with a friendly atmosphere.

滋賀医科大学留学生との交流

KEK BATIK
PENGAT PISANG

滋賀医科大学留学生との交流会

滋賀医科大学留学生との交流会

滋賀医科大学留学生との交流会

滋賀医科大学留学生との交流会

留学生等バス研修旅行

Excursion for Overseas Students and Researchers in 2014

平成26年12月2日（土）、外国人留学生及び外国人研究者等の日帰り見学バス旅行を実施しました。当日は、堀池副学長らの引率のもと総勢35名が参加し、京都の西陣織会館と東映太秦映画村を訪れました。

西陣織会館では、職人の実演やビデオ映像を通じて西陣織の製作工程を学び、着物ショーでは華やかな着物の世界に目を奪われました。

お昼は嵯峨野の落ち着いた雰囲気のなかで和風の創作料理に舌鼓を打ち、和やかな時間を過ごしました。東映太秦映画村では、江戸の街並みを再現した時代劇のオープンセットを見てまわり、忍者屋敷、大道芸、迫真の立ち回りなどを楽しみました。

留学生同士の交流を深め、日本の伝統文化に触れる有意義な1日となりました。

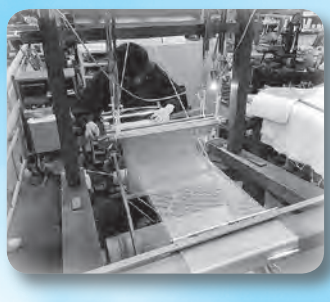
On December 6, 2014, an excursion for overseas students, researchers and their families was held. A total of 35 people participated into this bus tour, led by Vice-president Horiike, and they visited Nishijin Textile Center and Toei Kyoto Studio Park.

At Nishijin Textile Center, participants could learn the process of manufacturing "Nishijin" textiles, seeing demonstrations of hand weaving by skilled craftsmen, diorama display and video exhibits. Also, they were enchanted by the gorgeous kimono show.

At lunch time, they enjoyed Japanese culinary art at a restaurant in Sagano in a relaxed and comfortable atmosphere.

At Toei Kyoto Studio Park, they looked around the outdoor set for filming of period dramas (jidaigeki films), which depicts a street from the Edo period, and enjoyed Ninja Mystery House, street performances and thrilling sword fight acting.

The participants could strengthen their friendship further with one another, and enjoy learning about some Japanese culture. It was a fruitful and enjoyable day for every participant.



新任教員紹介

分子神経科学研究センター
（認知症研究分野）

教　授
西　村　正　樹

平成26年11月1日付をもち、分子神経科学研究センター認知症研究分野の教授を拝命致しました。神経難病のなかでも代表的な認知症の基礎研究は本学における主要研究領域の一つとして位置付けられており、改めてその責務の重さを実感しています。

私は京都大学医学部を卒業後、神経内科学教室（亀山正邦教授）に入局しましたが、その後、東京都立神経病院（椿忠雄院長）で高度専門医療に携わるなかで、神経変性疾患の原因や病態に関する求知心を募らせました。折しも、隣接する東京都神経科学総合研究所が主催したセミナーで京都大学中西重忠先生のリヴァース・ジェネティクス手法を用いたグルタミン酸受容体遺伝子クローニングの講演を拝聴し、燻っていた基礎研究への興味に火がつきました。

結局、８年間の臨床経験のあと大学院に入学し、中西研の門を敲きました。メンターのオーラによるのか中西研では院生全員が意欲にあふれ、深夜休日を問わず寸暇も惜しみ実験に明け暮れていました。基本を叩き込まれた後、マウス副嗅球の嗅覚記憶形成メカニズム解明というテーマを頂き、私もすっかり基礎研究に魅せられその虜になっていました。院修了後は、アルツハイマー病原因遺伝子プレセニリンのクローニングに成功していたトロント大学 Peter St George-Hyslop 教授の研究室に留学し、プレセニリン機能解析のテーマで本格的に認知症研究に取り掛かりましたが、そこで幸いにもγセクレターゼの解明に大きく貢献する成果を得ることができました。研究における原体験として国内外でトップレベルの研究室に参加できたことは、私にとって大きな宝になっています。

帰国と同時に本学に着任いたしました後も、アルツハイマー病研究一筋に打ち込んできました。脳へのアミロイド沈着が病前状態であるとする視点からみた実質的な予備群は高齢者の半数以上に及ぶことからも、本症の医学的克服は社会的課題となっています。私の主テーマはアミロイドβの脳内産生系の解析です。ここから、独自の治療法開発への道を切り開いていきたいと考えています。

自身の研究意欲の源を顧みるとき、研究者教育者として学生や若い研究者に伝えるべきものは決して知識や技術ばかりでなく、医学生命科学の進歩に興味をもてる目であり、その研究の醍醐味ややりがいの感得であるという基本を再確認しています。もとより微力ではありますが、鋭意努力して参りますので、何卒ご支援ご指導のほどをお願い申し上げます。

経歴

1984年 3月	京都大学医学部医学科卒業
6月	京都大学医学部附属病院神経内科入局
1987年 4月	東京都立神経病院神経内科医員
1988年 7月	日本神経学会認定医（専門医）
1996年 3月	京都大学大学院医学研究科修了
5月	京都大学医学博士
1997年 1月	トロント大学医学部博士研究員
1999年12月	滋賀医科大学分子神経科学研究センター助教授（准教授）
2010年11月	日本認知症学会専門医
2014年11月	滋賀医科大学分子神経科学研究センター教授

生化学・分子生物学講座
（分子生理化学部門）

准　教　授
寺　田　晃　士

平成26年12月1日付けで、生化学・分子生物学講座（分子生理化学部門）の准教授を拝命致しました。非常に微力ではありますが、分子生理化学部門での研究教育活動をとおして、滋賀医科大学の医学研究の発展および医学教育のために力を尽くしたいと願っております。

私は大学院時代に、細胞内シグナル伝達機構を研究する研究室に参加しました。私の所属研究室を含め、生化学的に研究を進めるグループは、自分の研究対象である分子に結合するタンパク質を同定し、さらに、そのタンパク質への結合タンパク質を探索するという手法で、研究対象の分子が関与するシグナル伝達機構の研究を進めていました。一方で、遺伝学を用いて細胞内シグナル伝達を研究するグループもあり、その方法は、研究対象のシグナル伝達系と、用いるモデル生物の示す表現型との関係をまず明らかにして、その後で、その表現型が干渉されている変異体を見つけ、その原因遺伝子の解析を行うことにより、研究対象のシグナル伝達系を研究するというものでした。

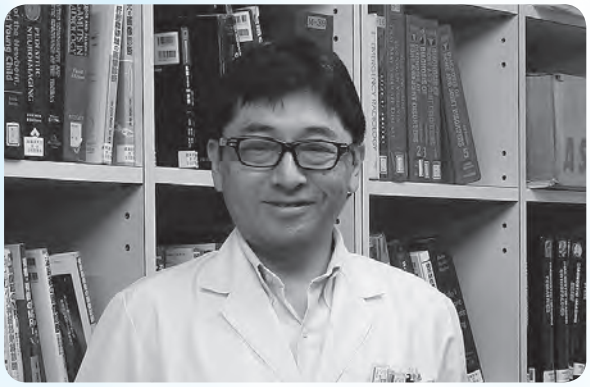
大学院生であった私は、同じ生命現象を研究する上で、そのように大きく異なるアプローチが存在することに非常に驚くと同時に、ある生命現象を研究する上で、複数の視点・研究手法を取り入れることの重要性を感じました。自らの研究対象の解析において、自分の用いている研究手法が最適であるとは限らないからです。そのような理由で、修了後は、大学院時代とは全く違う研究分野で、それまでに経験のない研究手法・考え方を学びたいと考え、テキサス大学、大阪バイオサイエンス研究所で、アフリカツメガエルやニワトリ、マウスなど、生物個体を用いて研究を推進する研究室に所属し、網膜未分化前駆細胞の増殖・分化の制御機構の研究を、分子生物学的手法、遺伝学的手法を用いて行いました。

この度、生化学・分子生物学講座分子生理化学部門の一員として、研究に参加させていただけることになりました。ここは、免疫細胞の抗原受容体遺伝子再構成の分子機構をエピジェネティクスという観点から、世界に先駆けて明らかにしてきた研究室です。そのような研究室への参加には強いプレッシャーを感じますが、同時に、大きなやりがいを感じます。これから新たな研究テーマにチャレンジすることになりますが、これまでの経験を通して得てきたことと、ここで新たに学ぶ知識・実験技法とを組み合わせることにより、微力ながら、研究の発展に寄与したいと願っております。また、滋賀医科大学は、共通実験設備が充実し、各共通実験機器の操作に精通したスタッフの方々がいらっしゃる非常に恵まれた研究環境をもつ大学です。このようなすばらしい環境で研究できることを大変幸せに思っております。今後とも、皆様方の御指導と御鞭撻を賜りますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

経歴

1995年 3月　東京工業大学生命理工学部卒業
2000年 3月　東京工業大学大学院生命理工学研究科博士課程修了
2000年 5月　テキサス大学サウスウェスタン医学校博士研究員
2001年 9月　大阪バイオサイエンス研究所特別研究員
2005年 9月　同研究員
2011年 4月　北海道大学大学院医学研究科助教
2014年12月　滋賀医科大学生化学・分子生物学講座（分子生理化学部門）准教授

放射線医学講座



准　教　授
新　田　哲　久

2015年１月１日付けで放射線医学講座の准教授を拝命いたしました。私は、滋賀医科大学9期生で、学生時代、研修医時代、大学院時代を含めると、滋賀医科大学とは30年のおつきあいになります。

私は、1989年に滋賀医大を卒業後、放射線科に入局しました。1989年は、滋賀医科大学附属病院長も務められました森田陸司先生が、教授として着任された年でした。この年に、滋賀医大で一号機となる1.5TMRIが稼働しました。当時はまだアナログ時代で、CTやMRIなどすべての機器がフィルム出力されており、研修医の仕事は、まずは、読影するに足るフィルムを作成することでした。CT装置は２台稼働していましたが、検査件数は１日10数件で、造影CTを施行するとなると、１検査にほぼ１時間近く費やしていた時代です。もちろん紙カルテの時代ですから、読影レポートも手書きで、字が読めないとよくクレームをいただいたものです。フィルム作成と造影剤の注射が研修医の仕事でしたので、検査終了後、夕方以降夜遅くまで、上級医の先生と一緒に読影をすることが日常でした。

現在は、デジタル化が進み、フィルムはありません。読影レポートもキーボードで入力し、電子カルテ上に反映されます。私の入局当時と比べると、驚くべき進歩だと思います。画像診断機器の進歩も目覚ましく、たとえばCTは１断面を撮影するのに４秒以上、その画像ができるまで10秒以上必要であった時代から、0.35秒で14cm近くのボリュームデータを撮影でき、ほぼリアルタイムに画像ができる時代へと変化しました。また、CTやMRIの検査数も、10倍近くに増加し、診断装置の高性能化に伴い、得られる情報量も圧倒的に増加、高度な専門性が求められるようになってきました。加えて、臨床各科の先生方から、読影レポートを早く作成してほしいという要求も強くなってきました。

1999年10月には、村田喜代史先生が、放射線科教授に就任されました。村田先生のバックアップもあり、インターベンショナルラジオロジー（IVR）と画像診断の基礎研究に目を向けて大学院生を育てる仕事に取り組みました。放射線科は、長年蓄積されてきた画像診断学を修得していく面白さはもちろん、基礎研究の成果を臨床に導入していく、所謂トランスレーショナル・リサーチがやりやすく、やりがいのある分野だと思います。今後、患者さんの利益になる、低侵襲治療法や画像診断がさらに発展するよう、いっそう努力し、貢献したいと思います。また沢山の研修医が放射線科に入局してくれて、幅広い知識・技術をもった多くの放射線科医が滋賀医科大学から育つよう、さらに滋賀医科大学の発展に貢献できるよう精進したいと存じます。今後とも、皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

経歴

1989年 3月	滋賀医科大学医学部卒業
1989年 5月	滋賀医科大学附属病院研修医（放射線科）
1991年 4月	長浜赤十字病院放射線科医員
1994年 4月	滋賀医科大学大学院入学
1998年 4月	正信会ほうゆう病院放射線科部長
2000年 4月	滋賀医科大学放射線科助手
2005年10月	滋賀医科大学放射線科講師
2015年 1月	滋賀医科大学放射線医学講座准教授

臨床看護学講座
（母性看護学・助産学）

准　教　授
千　葉　陽　子

2015年１月１日付けで滋賀医科大学医学部看護学科・臨床看護学講座（母性看護学・助産学）の准教授を拝命致しましたので、本誌をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は助産師資格を取得後、日本で助産師としての臨床経験を積み、その後の数年間は国際保健分野に身を置いておりました。青年海外協力隊の助産婦隊員として西アフリカ仏語圏のコートジボアール共和国に赴任致しましたのを皮切りに、シリアアラブ共和国、ケニア共和国で活動し、また、アメリカの修士課程で学び、フィリピン共和国でのインターンシップも体験致しました。コートジボアールでは赴任中にクーデターが勃発し、それ以降もずっと不安定な政情が続いております。現在シリアが内戦状態にあることはご承知のとおりですし、ケニアでも部族間対立による暴動などが散発しております。これら容易に入国できない国々に赴任し、首都ではなく地方都市で地元の人々と共に生活し活動できたことは、私の人生における大きな宝です。これらの国々を含む諸外国が抱えている政治、宗教、部族、領土などに関する問題の複雑さと深さに関心を持ち続けながら、今後も一般の人々、特に女性や子どもの視点で物事を考える姿勢を忘れずにいたいと思っております。

その後ご縁があり、地元京都に戻って看護・助産教育に携わる機会を得て現在に至っております。京都大学では、開発途上国の診療記録、特に分娩台帳のずさんさをどうにか発信したいという思いのもと、ケニア地方都市での分娩台帳の実態を調査し、博士論文としてまとめさせて頂きました。また２人の子どもを出産し、自らが日本の母子保健システムの利用者になる貴重な機会も得ました。そして少子化が進む中、妊娠・出産・子育てと仕事の両立という大変身近な課題に日々遭遇しながら過ごしております。

これまで海外でも日本でも、常に助産師としてのアイデンティティーをもって様々な経験を積んで参りました。今後は「Think globally, act locally」をモットーに、滋賀医科大学での教育・研究に取り組む所存でございます。歳を重ね子育て真っ最中でもある今は、日本にしっかりと根付き、自己の経験を母性看護学・助産学の学問体系に組み込んで後進に伝える努力をして参りたいと思っております。しかし、まだまだ至らない点、学ぶべき点も多くございますので、皆様方からのご指導・ご鞭撻を切にお願い申し上げる次第です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

経歴

1993年 4月	京都府立医科大学附属病院　助産師
1997年 5月	まつしま産婦人科小児科病院　助産師
1999年 7月	青年海外協力隊助産師隊員（コートジボアール共和国）
2002年 6月	長崎大学熱帯医学研究所熱帯医学研修課程
2003年 3月	JICA 短期専門家（シリアアラブ共和国）
2003年 9月	Department of International Health, Boston University School of Public Health
2005年 1月	Master of Public Health (Boston University)
2005年 3月	NPO/JICA プロジェクト妊産婦ケア分野テクニカルアドバイザー（ケニア共和国）
2006年 4月	京都大学医学部保健学科　助手
2007年 4月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻（助教）
2013年 1月	論文博士（社会健康医学）（京都大学）
2015年 1月	滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座　准教授

定年を迎えるにあたり

生命科学講座（化学） 木 村 隆 英

1983年から32年近く、滋賀医大でお世話になりました。神戸大学理学部の構造化学で研究を始め、反応を扱う化学をと生物有機化学・有機反応機構論の京大化学研究所へ移り、さらにシカゴ大で酵素修飾、南イリノイ大学で酵素反応機構をポスドクとして、そして滋賀医大で茶カテキンやフッ化物イオン、さらに音をエネルギー源とするソノケミストリー（超音波化学）へと好きなように研究をさせていただきました。医科大学の中で、MDでない理学部出身の異分子としての存在は辛いものがありましたが、思い返してみると、異分子であるが故の様々な経験もさせていただき、幸せな日々を送らせていただいたようにも思います。

先代の安藤喬志教授についてソノケミストリー研究会の立上げに参加し、のちには、研究会から日本ソノケミストリー学会への改組や京都でのソノケミストリー国際会議の開催を学会会長として実現できました。これも滋賀医大での研究があったればこその経験でした。研究室の皆さんの協力をありがたく思っています。

滋賀医大における化学の教育では、学生さんにさんざ苦労をさせました。「すぐに役立つ知識は、すぐに役に立たなくなる知識」という思いがあり、技術者でもある医師にハウツーは必要でしょうが、未来を切り拓く医師には、ハウツーの基となるもっとベーシックなところでサイエンスとしての化学を学んでおいてほしい。それは、役に立つと感じなくとも、皆さんの血となり肉となっていくのです。と伝えたかったのですが、難関の入学試験を潜り抜けてきたばかりの学生さんに、国家試験という医師への入学試験がまだ待っている学生さんに、見えない先への備えを伝えることがとても難しく感じる日々でした。それでも、強いた苦労でこれからの分子医学に切り込んでいける血肉はできているはずだと信じているのですが。

大学の中では、教育研究評議会や教育方法改善部門長など大学運営に関わるいくつもの経験をさせていただきました。また、20年ほど前の本学のLAN立上げ時に、滋賀医大の全く初期の試験的ホームページの立上げに関わらせていただいたのも懐かしい思い出になっています。

大学は、これから国際基準に向って変革していかなければなりません。そんな中、一般教育など外注すれば済むという話も耳にしますが、本学のような単科大学にこそ、その体内に異分子による教育が存在することが重要だと思います。一色に染まってしまうことほど怖いことはありません。また、学生さんには、高度な医療技術者であると同時に、ぜひ深い教養と広い視野を身につけたShiga Medical Scientistに育ってほしいと願っています。

最後になりましたが、これまでの皆様のご厚情・ご支援に心より感謝を申し上げますとともに、ますますのご発展をお祈りいたします。ありがとうございました。

聴覚脳の進化

解剖学講座（神経形態学部門）　工　藤　　基

私のメインテーマは聴覚脳の進化です。神経科学の分類からすれば、感覚系、聴覚ということになるでしょう。ヒトの場合、聴覚は言語や音楽という文化活動に関わってきます。しかし、多くの動物ではひとつのコミュニケーション手段にすぎません。それが進化の過程でどのように変遷してきたのか。聴器と脳の比較解剖学でそれをひも解くのが私のライフワークです。私は国内で５つの大学、海外で２つの大学に籍をおいていました。その中で特にインスピレーションを与えられた体験を紹介したいと思います。

研究生活のスタートは1975年卒業直後の岡山（新見嘉兵衛教授）でした。大学紛争ただ中の1969年に入学した私は否応なく学生運動にまきこまれていました。同時に日本の高度成長にともなう物質的豊かさが急激に進んだ時代でもありました。そんな時あえて基礎医学の門をくぐったのは自分なりに何かしっかりとしたものを求めていたゆえだと思います。そのころ研究成果を英語で書き、国際誌に発表することが求められはじめていました。新見先生からは英語論文の書き方を教えていただきました。新見先生は比較解剖の先達であり、特に視床の細胞構築にかけては世界に類をみない精緻さでネズミ、ネコ、サルを用いて研究されました。その功績により、学士院賞を受けられました。

フロリダ州立大学とメルボルンのモナッシュ大学に留学の機会が与えられました。いずれの大学でも聴覚中枢の研究をさせてもらえ幸運でした。また、日本では実験することが難しい有袋類を使えたのは貴重な体験でした。フロリダ（Bruce Masterton教授）でのアメリカ体験は私に大きな影響を与えました。そこは医学部ではなく心理学部です。日本では心理学は文系ですが、米国では心理学者が神経科学の主流を成していました。動物脳の一部を剥離して行動実験をする研究が主体で、私の役割は神経解剖的基盤を探ることでした。オポッサム（Didelphis virginiana）という原始的ほ乳類を使って、聴覚脳の神経回路を研究しました。研究室の動物舎には、ハリネズミ、アルマジロ、イグアナ等多くの種が飼われていました。Masterton先生は進化論の強烈な信奉者で、それらの動物を見せながら「おれもおまえも先祖は同じだ」とおっしゃいました。人種や民族間の争いが科学的にみればナンセンスなものだと言いたかったのでしょう。フロリダは南部に特有な保守的な考えを持った人たちが多く、進化論を唱えることさえ躊躇されるような土地柄です。その中で人々が差別や偏見を乗り越えて仲良く暮らすべき生物学的基盤を示されました。今の世相にも通じるような気がします。

さて、今解剖学は新しい局面に入っています。内視鏡や血管内手術が多くなり、外科医は、人体構造を３次元的に捉えることを、肉眼だけでなく内視鏡や液晶モニターでせねばなりません。ここに臨床解剖の重要性があります。金沢医科大学の本間智教授が本学に在籍されていた間に３本の肉眼解剖の論文を共著で書かせていただきました。そしてマクロ解剖の醍醐味を少しではありますが味わうことができました。本学はマクロ解剖のための人的資源に恵まれ設備もよく整っている大学だと思います。本学解剖に17年間いたものとして是非この良きシステムを維持発展させていってほしいと願っております。

図書館改修レポート

8月から始まった、図書館の耐震・機能改修工事が概ね終了しました。
新しい部屋ができたり、ドアがついたり、座席が増えたり、
みなさんが快適に勉強できるよう工夫をしています。

1階 ラウンジ・入口～階段・廊下

名前まで変わりました。
ブラウジング改めラウンジです。

自動ドアがつきました。
少しは暖かくなったかな？

廊下

入口～階段

天井がロッジのよう☆
階段にはカーペットが敷かれました。

机も増えたよ。

カベができて
個別空調がつきました。

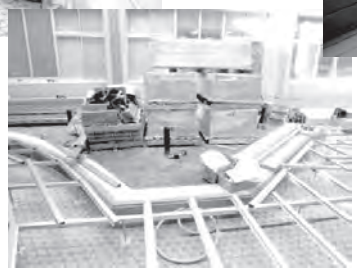
2階
西側・アクティブラーニング室

中庭に
ウッドデッキが
できるまで

1

2

3



4
Completed!

工事中は何かとご不便をおかけいたしました。みなさまのご協力により作業を滞りなくすすめることができました。あらためまして御礼申し上げます。
今後、天井と床の改修ならびに資料の移動等を完了し、４月にリニューアルオープンする予定です。新しくなった図書館をよろしくお願いいたします。

キャンパスライフ

学生の論文が「Journal of Investigative Dermatology」に掲載されました。

医学科第４学年　杉浦　周嗣
所属研究室　解剖学講座　生体機能形態学
指 導 教 員　宇田川　潤　教授
研究テーマ　Prolactin-Induced Protein　のヒト皮膚への作用について

10年くらい前、父からアトピー性皮膚炎の患者と健常人の皮膚のマイクロアレイデータをどうにかしたい、と相談を受けました。データは病気の状態と遺伝子の発現の仕方できれいに分類された状態で渡されたのですが、その量があまりにも多く、また、名前だけでは各々の遺伝子の仕事が分からず、扱いにかなり苦労しました。その中から重要そうな遺伝子を絞り話し合った結果、私たちにも研究が始められて、尚且つ臨床的に面白そうなものとして選ばれたのがPIPでした。

それから生物の佐藤先生や解剖の藤宮先生に助けていただきながら研究をしていたのですが、佐藤先生は定年を迎えられ、藤宮先生は栄転され、今は宇田川先生のもとで研究させていただいています。

私がこのチームで研究できて最も幸せだった事は、結果が出なくても誰にも迷惑が掛からない事、結果を急ぐ必要が無い事でした。なので、気になる点があれば時間をかけてじっくり研究できました。逆に、重要な相談は週に１、２回しかできない事には苦労しました。また、こちらの大学はカリキュラムがかなり厳しく組まれている上、試験も留年するほど厳しいので、まともに実験ができるのは長期休みだけでした。お正月、深々と降る雪の中大学で仕事をしていた年も何度かありました。

PIPの論文は本来３部構成だったのですが、時間が足りず現在２本目が出たところです。今後どうするかは未定ですが、しばらくは放ったらかしてしまっていた妻との時間を優先しようと思います

掲載論文の紹介

Sugiura S, Tazuke M, Ueno S, Sugiura Y, Kato I, Miyahira Y, Yamamoto Y, Sato H, Udagawa J, Uehara M, Sugiura H.
Effect of Prolactin-Induced Protein on Human Skin: New Insight into the Digestive Action of This Aspartic Peptidase on the Stratum Corneum and Its Induction of Keratinocyte Proliferation.
Journal of Investigative Dermatology 2014 Oct 14　PMID: 25313533

プロラクチン誘導蛋白質（Prolactin-Induced Protein ：PIP）のヒト皮膚への作用について：PIPに含まれるアスパラギン酸ペプチダーゼ（Aspartic Peptidase）の角質層への消化作用と、表皮角化細胞の増殖誘導作用

これまで臨床的には、汗の溜まりやすい部位から湿疹が始まったり、乳幼児の唾液の付きやすい部位に湿疹がしばしば好発することは知られてきましたが、それらの原因は明らかにされていませんでした。

今回我々は、汗や唾液に多く含まれる Prolactin-Induced Protein（PIP）という分子に着目し、研究しました。PIP にはカビが持つ酵素とよく似た配列が含まれるため、その配列が皮膚に悪影響を及ぼすのではないかと考えました。

実際にこの配列を模して作ったペプチドをヒトの角質層細胞やヒト皮膚３Ｄモデルに作用させると、皮膚の表面構造の破壊や、表皮細胞の過剰な増殖を誘導する事がわかりました。

今回の結果は、外的な抗原が無い状況でも、汗や唾液に含まれている PIP が皮膚のバリア機能に悪影響を及ぼし、皮膚の過剰な増殖を誘導する可能性を示しました。

解剖学講座　生体機能形態学部門
教授　宇田川　潤

杉浦君が実験を行っている研究室を紹介します。

杉浦君の研究紹介

今回、J Invest Dermatolに研究成果を発表した杉浦周嗣君は、彼自身の研究テーマであるPIPの皮膚に対する作用に関して、お父様の杉浦久嗣先生（本学１期生　解剖学講座客員講師）と二人三脚で研究を続けてきました。勉学で忙しい中、休日・夜間を利用して研究室に通い黙々と実験を進めていくその姿に、純粋に研究を楽しみ科学の真理を追究しようとする研究者本来の姿をみて、本講座のスタッフも学生の皆さんも刺激されています。杉浦君は、本研究において、汗や唾液に大量に含まれるPIPが湿疹の原因の一つである可能性を初めて示しました。基礎と臨床研究を融合した本研究の成果は、将来的に日常診療にも展開可能と考えられ、社会的にも非常に価値の高い研究です。今後の研究の発展が大いに期待されます。

研究医養成コースの学生の研究紹介

金子隼也君、原澤俊也君、河野匡暁君は胎生初期の低栄養ストレスと生後の精神疾患や発達障害発症のリスクとの関連を調べています。低栄養ストレスは胎生期の神経幹細胞をはじめ種々の未分化な細胞の性質を変化させ、生後の脳機能異常や行動異常を引き起こすと考えられるため、そのメカニズムを解明しようと日々研究を続けています。本年度、金子君は研究成果をワシントンDCで開催されたNeuroscience 2014で発表し、原澤君、河野君もこれまでに日本解剖学会や日本先天異常学会などで発表をしています。

教員および大学院生の研究について

２名の教員と２名の大学院生が以下の研究を行っています。

准 教 授：岡野純子（皮膚ホメオスタシス破綻の病態機序の解明とその改善治療の開発）
助　　手：木村智子（胎生期ストレスによる四肢骨成長抑制メカニズムの解明）
大学院生：玉川俊広（霊長類の把握機能の形態学的および力学的考察）
大学院生：日野広大（無眼球症のメカニズムの解明）

学生へのメッセージ

解剖学講座では学生の皆さんに研究室を開放し、いつでも研究に触れられる環境を整えています。「研究ってどんなことをするの？」と思っている方から、未解明の問題に挑み自分で研究して明らかにしたいと思っている方まで、皆さん気軽に足を運んでみて下さい。

学長と学生との懇談会について

本学では、学生の意見や希望を聴取し、適切に大学の運営に反映させていくことを目的として、毎年「学長と学生との懇談会」を開催しています。今年度は、平成26年10月28日に看護学科の学生、11月11日に医学科の学生を対象として開催しました。懇談会当日に学生から出された、教務・課外活動・修学支援・施設設備等に関する意見のうち、いくつかの事項について以下のように紹介します。

なお、今後も学生からの意見を受け入れ、より良いキャンパスライフのため、改善に取り組んでいきます。

●教務関係

「がん相談支援体制に関する教育を充実させてほしい。医師1人でがん患者を治療することは困難で、がん相談支援体制を活用することが不可欠だと思う。」

回答：　腫瘍内科・緩和ケアの臨床実習の中でその様な内容を学習する機会があります。

●課外活動関係

「ボート部の艇庫にインターネットを繋いでほしい。」

回答：　特定のクラブの学外施設にインターネットを引くことは予定していません。スマートフォン等を利用して下さい。

●修学支援関係

「看護学生も利用しやすい自習室を設けてほしい。」

回答：　多目的教室等の利用条件は医学科、看護学科の区別はありません。看護学科棟に設けるというのは、スペースに余地がなく、確保は難しいと考えます。多目的教室などを、前もって予定を立てて使うようにして下さい。

●施設設備の改善・運用関係

「看護学科のバイク置き場がいっぱいで停められないことがあります。1つのバイクが場所をとっていることもあり置き方の工夫も必要だと思います。」

回答：　一時的にテープで区分けをしたところ、一定の効果が見られたので、今後線引きなどを検討します。

「トレーニングルーム等の施設のドアをカードキー化して欲しい」

回答：　カードキーの導入はコストがかかり、また維持費も必要になります。管理の面でも問題点が多くあるので、導入は難しいです。

アジア疫学研究センター紹介

アジア疫学研究センターにおける疫学研究（その2）
ー NIPPON DATA、滋賀脳卒中データベース、高島研究ー

アジア疫学研究センター　特任助教
久　松　隆　史

本稿では我々が取り組んでいる疫学研究プロジェクトのうち、全国300地区からの国民代表集団の追跡により生活習慣病・健康寿命に影響を与える要因を検討しているNIPPON DATA、滋賀県全域における脳卒中の発症率を明らかにする滋賀脳卒中データベース、心血管病の地域発症登録研究ならびに生活習慣病の発症要因を明らかにするゲノム・コホート研究である高島研究、以上3つの疫学研究についてご紹介します（図1）。

図1．アジア疫学研究センターを中心とする疫学研究プロジェクト

※アジア疫学研究センターパンフレットより引用

1．NIPPON DATA

NIPPON DATA（National Integrated Project for Prospective Observation of Non-communicable Disease And its Trends in the Aged）は国が実施した全国調査である循環器疾患基礎調査対象者の長期追跡研究（コホート研究）です。

1980年（昭和55年）循環器疾患基礎調査、1990年（平成2年）循環器疾患基礎調査、および2010年（平成22年）循環器疾患基礎調査後継調査（厚生労働省研究班が実施）に登録された30歳以上の

日本人一般住民（男女）の追跡研究が、それぞれNIPPON DATA80、NIPPON DATA90、そしてNIPPON DATA2010となります。

NIPPON DATA80の追跡調査が1994年に旧厚生省研究班で開始されて以来、5年ごとの生死と死因の追跡が実施されており（NIPPON DATA80は29年、NIPPON DATA90は20年、それぞれ追跡が完了、追跡率は90％以上を維持）、さらには生死追跡に加え日常生活動作（ADL）と生活の質（QOL）の調査も続けられています（図２）。また、NIPPON DATAの対象者は同時に国民栄養調査（2010年は国民健康・栄養調査）の対象者でもあるため、国民栄養調査対象者の追跡研究としても位置づけられます。

全国から無作為抽出された300地区の国民を対象としたこの研究は日本国民を代表する集団のコホート研究に位置づけられています。そして、得られた研究成果は「健康日本21」作成における基礎資料として、また、日本高血圧学会の「高血圧治療ガイドライン」および日本動脈硬化学会の「動脈硬化性疾患予防ガイドライン」における重要なエビデンスとして、活用されています。また、NIPPON DATAリスク評価チャートは、生活習慣病の日常診療で広く用いられるとともに、マスコミなどを通して、国民の生活習慣病予防の啓発にも役立てられています。なお、NIPPON DATA80/90の成立経過と主な知見などは、以下のウェブサイトにまとめられています。

http://hs-web.shiga-med.ac.jp/study/NIPPONDATA2010/

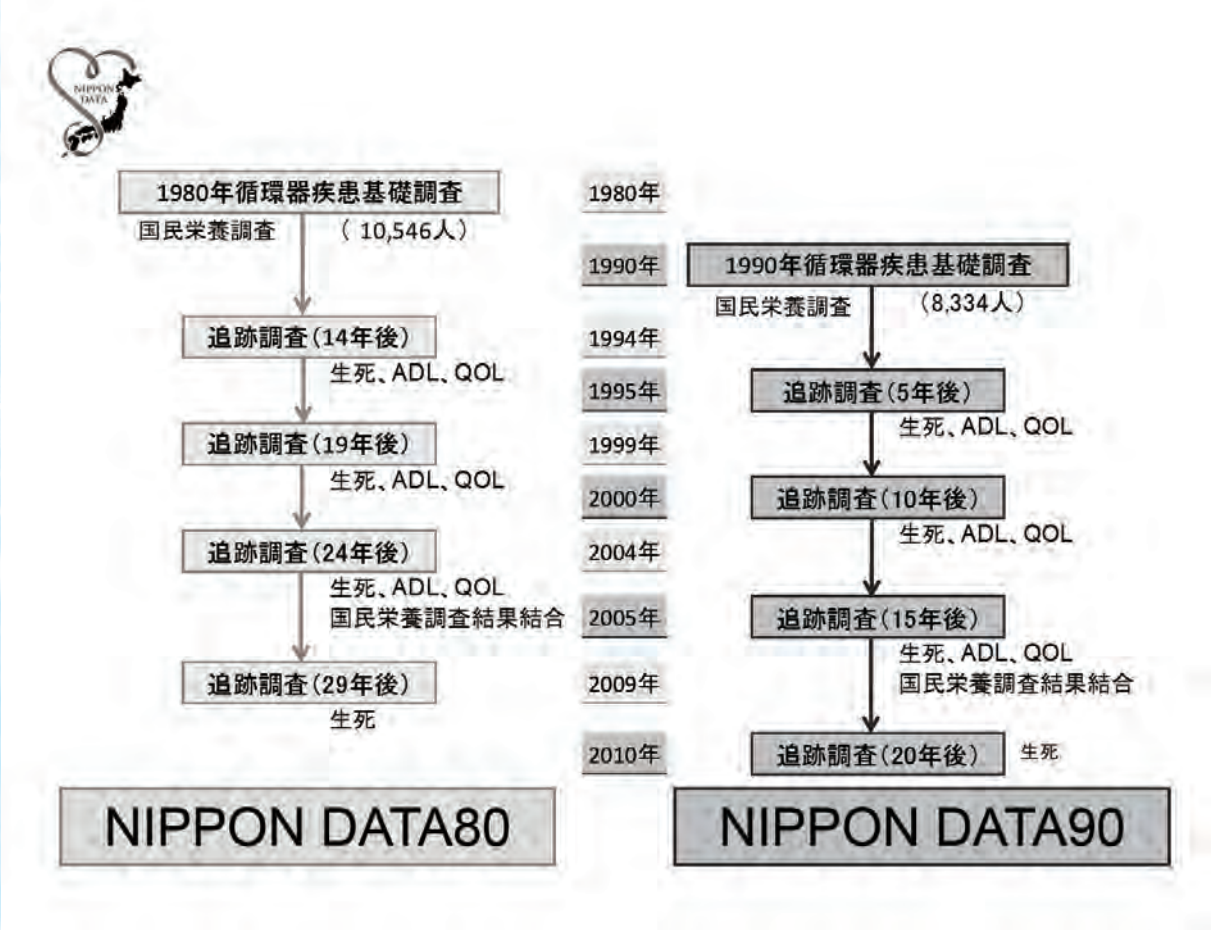


図2. NIPPON DATA80/90の追跡調査経過

2. 滋賀脳卒中データベース

滋賀脳卒中データセンターでは、2012年から滋賀県全県での脳卒中発症登録を実施しています。このデータベースは2011年以降に発症した脳卒中の急性期から回復期、慢性期、維持期までの情報を集積することで、地域における脳卒中の発症から社会復帰までの現状を明らかにし、広く県民に還元することを目的としています。またこの成果は発症から維持期、在宅までのスムーズな地域診療連携体制整備の基礎資料となります。

2011年に県内の脳卒中診療医療機関において脳卒中発症として登録された症例数は2738例であり、人口10万人当たりの年齢調整発症率は男性で137、女性で81でした。脳卒中発症の病型別割合（2011年）では、脳梗塞が1823例、脳出血が910例（脳内出血711例、くも膜下出血199例）でした。

滋賀脳卒中データベースに関する詳細情報および滋賀県における最新の脳卒中統計などは以下のウェブサイトをご参照下さい。

http://cera.shiga-med.ac.jp/ssdac/

3. 高島研究

高島研究は、高島市の協力を得て滋賀県高島郡(現高島市)で脳卒中及び心筋梗塞の地域疾患登録事業である高島循環器疾患登録事業と、2002年から同地域で実施している生活習慣病の発症要因を明らかにする高島コホート研究に分けられます。高島循環器疾患登録事業は、地域における循環器疾患の発症登録研究としては数少ない20年以上の長期にわたって発症登録が継続している研究です。日本人における発症率の実態を明らかにしその推移を検討することを目的としています。高島コホート研究は脳卒中、心筋梗塞、がん、糖尿病、高齢者認知症などの生活習慣病の発症・死亡が生活習慣や遺伝的体質とどのように関わっているかを明らかにすることを目的としています。また国内多施設共同研究であるJALS（Japan Arteriosclerosis Longitudinal Study）やJ-MICC Study（日本多施設共同コホート研究）などに参加しています。

前回から2回にわたり、我々が取り組んでいる疫学研究プロジェクトの内容およびその成果について、ご紹介しました。アジア疫学研究センターは、国内のみならずアジアにおける疫学研究拠点として、心血管病、がん、糖尿病などの生活習慣病予防・健康寿命の延伸に資する研究成果の創出ならびに人材育成を目的とし、今後も疫学研究を推進していきます。本センターの発展には、関係各位の一層のご理解とご協力が必要でありますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、本企画をご提案いただきました勢多だより編集長宮松直美教授ならびに執筆にあたりご協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

国立病院機構
東近江総合医療
センターだより

東近江総合医療センターにおける4年間の実績

滋賀医科大学総合外科学講座　教授　来　見　良　誠
（東近江総合医療センター　副院長）

平成22年に策定された滋賀県地域医療再生計画に基づき、滋賀医科大学が人的資源を投入して4年が経過いたしました。この間に「国立病院機構　滋賀病院」から「国立病院機構　東近江総合医療センター」に病院名も変わり、常勤医師数も10名から41名にまで増員し、病床数も120床から320床に増床いたしました。この4年間の実績を紹介いたします。

【講座設置の目的】

滋賀医科大学の総合外科学講座・総合内科学講座は、平成22年1月に策定された滋賀県地域医療再生計画において、東近江医療圏での国公立3病院の集約化・再編により、質の高い安定した地域医療の提供を目的とした国立病院機構東近江総合医療センターの設置を当初の目標とし、滋賀県下における安定的な勤務医確保の仕組みを構築するとともに、総合診療能力の向上に寄与することで滋賀県での総合医を養成する基盤づくりを目指し、平成22年6月に寄付講座として設置されました。

良質な診療を提供し、地域医療に貢献することはもちろん、医学部学生の臨床教育や初期研修医の指導、卒後医師の実地研修等を通じて医師の総合診療能力の向上に努め、さらに地域医療の担い手である初期診療の臨床能力を身につけた総合臨床医を養成する地域完結型の仕組みを構築し、滋賀医科大学が保有している最新の医療設備や技術、人材を活用しながら臨床研究をおこなうことで、医師のキャリア形成を支援し、優秀な医師の確保に繋げることを使命としています。

東近江総合医療センターにおける臨床面での実績
≪医師派遣と病床規模≫

平成23年4月1日より、教授2名（辻川知之・来見良誠）、准教授2名（杉本俊郎・五月女隆男）、助教4名（佐藤浩一郎・前野恭宏・仲川宏昭・松山千穂）が国立病院機構滋賀病院に出向し、国立病院機構所属の常勤医師とともに診療を開始しました。平成23年7月、准教授1名（大西正人）、10月には講師1名（菊地克久）が新たに着任し、総合内科学講座7名・総合外科学講座3名の体制となりました。消化器内科・消化器外科・糖尿病内科・呼吸器内科・救急科・循環器内科・整形外科の常勤医師が整備され、小児科医師を増員するとともに婦人科を開設し、産婦人科・小児科領域の診療の充実を計りました。一般病床は120床でしたが、5月より160床に増床し、結核病床を合わせると180床の規模に拡張しました。

平成24年4月1日には、助教2名（松山千穂・仲川宏昭）が他施設へ異動し、新たに助教1名（和田広）が着任しました。婦人科2名体制が整ったため、5月より220床とし、6月より産科診療を開始しました。学生実習を開始するために、講座所属の職員以外はすべて非常勤講師または客員教員（客員准教授・客員助教・客員助手など）の称号を付与し、平成24年4月1日より学生実習を開始しました。第5学年全員に対して（平成24年度：35期生93名21グループ、平成25年度：36期生107名21グループ、平成26年度：37期生112名21グループ）各グループ2週間ずつの臨床実習を行いました。指導医1名に対して学生1名

の1対1対応とし、毎日異なる診療科目をローテーションするシステムとしました。臨床研修は協力型研修施設として登録されており、現在までに46名（平成24年度：13名、平成25年度：4名、平成26年度：29名）がローテーションしました。また、当年度より管理型臨床研修施設となりました。

平成25年4月には、新たに助教1名（安藤厚生）が着任し、5月には助教1名（佐藤浩一郎）が他施設へ異動しました。平成24年秋より建築が進められていた7階建ての新病棟が4月にオープンし、6病棟320床の病院となりました。内科系診療科は主に、南4病棟（小児科）・南5病棟（総合内科・循環器内科・神経内科）・南6病棟（消化器内科）南7病棟（呼吸器内科）を使用し、外科系診療科は主に、東2病棟（呼吸器外科）・南3病棟（産婦人科・眼科・歯科口腔外科）・南4病棟（整形外科）・南6病棟（外科・消化器外科）・南7病棟（呼吸器外科）を使用することになりました。10月からは心臓血管外科および精神科の外来診療を開始しました。新病棟の完成直後より外来診察室の改修を開始し、12月には外来改修が完了し、旧病棟の解体が開始され、その跡地は現在の駐車場としました。

新病棟には200名収容の会議室（きらめきホール）があり、講演会・研究会などを開催するとともに、災害時の対策本部としての機能を持つよう整備しました。10月には、電子カルテが導入されました。導入当初は、慣れない操作に時間を要したため、診療時間が延長することが頻発していましたが、6か月経過した平成26年3月末には安定稼働するようになりました。講座開設からの3年間で、120床から320床にまで増床し、新棟建設、名称の変更、電子カルテの導入など多くの事業を円滑に遂行いたしました。

平成26年4月1日には、助教1名（安藤厚生）が異動し、新たに助教4名（小熊哲也、伊藤明彦、小島正継、米田真悟）が着任しました。泌尿器科医師2名が着任し、7月には神経内科医師1名が増員となり、総医師数は41名となりました。新入院患者が1か月あたり400名を超えるようになり、基幹型臨床研修病院として認可されました。平成26年度には、病床稼働率は徐々に上昇し、現在の平均稼働率は75.3%ですが、最大92.8%を達成しました。

≪通常診療と当直体制≫

日常の診療では、通常の時間内においては標榜科の診療科全ての医師が診療を行っています。時間外では、内科系疾患には総合内科を中心に、10人体制で診療し、24時間の対応をおこなっています。また、外科系疾患には総合外科をはじめとして、外科、呼吸器外科、整形外科の各医師が参加し、10名体制で24時間対応をおこなっています。時間内救急は担当医師を決めて対応し、可能な限り受け入れる方向で診療にあたっています。

≪総合内科カンファレンス≫

内科系診療科では、毎朝8時20分より総合内科カンファレンスをおこない、当直時間帯に受診した症例について全員で症例検討をおこなう体制となっています。早朝の症例検討には、全科の医師が自由に参加できるようになっており、関連する診療科への引き継ぎが円滑に行える体制となっています。また、週3回ミニレクチャーを行い、最新知識の共有化を図っています。本カンファレンスには、指導医・研修医のほかに臨床実習の学生が全員参加するシステムとしています。

≪麻酔科の安定化≫

手術症例の増加とともに麻酔科の充実が喫緊の課題となり、滋賀医大麻酔科に依頼し、当面の間非常勤医師の補充で麻酔科医師の安定供給が可能になるように対応していただいています。今後ますます増加する手術症例を安全に手術していく上において麻酔科は極めて重要な診療科であり、重点的な対応が必要であると考えています。平成24年度の全手術症例は808件で、麻酔科管理によるものが511件実施

されています。平成25年度の全手術症例は1,083件で、麻酔科管理による全身麻酔症例が561件実施されています。平成26年度の全手術症例数は1,368件で、麻酔科管理による全身麻酔症例は564件となっています。

現在、麻酔科管理が必要な症例であっても、一部の症例では各科対応で診療にあたっていますが、麻酔科医師一人体制では限界に達しています。また、麻酔科藤野医長（総合外科学講座客員准教授）は、通常の麻酔科診療のみならず学生実習にも積極的に参加し、指導内容についても学生から高い評価を得ています。手術室の薬剤管理は滋賀医科大学の方法に準じたシステムを導入し、手術室の人的資源の有効活用に大きく貢献しています。

≪地域医療の特殊性≫

滋賀医科大学附属病院の患者さんの平均年齢より15歳程度高齢の患者層を対応としているため、血管系疾患をはじめ多くの併存疾患をもった患者さんが多く、医師の一人ひとりが診療科を極端に限定することなく、総合化することが要求される環境であることが明らかになってきました。全国的な傾向として、外的要因による救急疾患より内的要因による救急疾患が増加していますが、高齢化の進んだ地域ではその傾向はさらに増幅されています。

≪がん診療連携支援病院≫

平成24年4月より滋賀県がん診療拠点病院としての滋賀医科大学医学部附属病院を支援する病院として、近江八幡総合医療センターとともに当院が認定され、現在がん診療連携支援病院として整備を進めています。

≪今後の課題≫

総合内科学講座・総合外科学講座の新設によってこの二つの講座に所属する医師のみならず、東近江総合医療センターへの医師派遣が非常に円滑に行われるようになり、安定した診療体制が構築され、今後このシステムが継続されるような体制づくりが要求されています。当院に勤務するすべての医師は、総合内科学講座・総合外科学講座に属する構造になっており、滋賀医科大学の第二教育病院的な特徴が明確になり、今後さらに大学との人的交流が強固になる事が期待できます。

総合外科学講座・総合内科学講座の実績

(1) 総合内科学講座の運営状況

専門分野だけを診るのではなく、内科学全般の基礎知識を学びながら専門分野を伸ばすＴ字型教育が重要と考え、総合内科外来を開設しています。スタッフ全員が内科学全般を把握しながら、各自の専門分野を高めていけるような医師集団になるよう、全員が初診を担当する環境としました。各医師がカバーする範囲は増えていますが、合併症が生じても迅速な対応ができるなど患者にとってはメリットが明らかになってきました。また、疾患別･臓器別に診るところから始めるのではなく、患者全体を診て、さまざまな専門医の意見を取り入れながら複数のプロブレムを同時に解決していく方法を取り入れているため、研修医に対する内科学教育の面においてもユニークかつ有用な講座として運営しています。

同一患者で異なる内科疾患を診る際は、スタッフ間のコミュニケーションを密にし、情報や知識を共有することで、従来の転科という手続きなく、シームレスな診療を継続することが可能になる環境としました。総合外科学講座とも連絡を密にし、定期的な外科と内科のミーティングなどで診療・治療の困難症例の検討会を開催しています。

滋賀医科大学、特に内科学講座との連携を密にし、同じ医療レベルの診療を提供できる環境となりました。大学病院の内科各診療科の医師にとっては、「総合内科コース」のような形で専門以外のトレーニングかつ専門分野での指導医として一定期間加わっていただき、総合内科スタッフとともに仕事ができるような人的交流の場所としても提供しています。コメディカルとのコミュニケーションを常にとりながら、看護師・栄養士・薬剤師とともに問題解決が図れるようにしました。

(2) 総合外科学講座の運営状況

外科系全般の診療および学生・研修医の教育と指導を積極的に行い、地域医療の充実と発展に貢献できる講座運営をおこなえるように環境を整えました。基本方針である①患者中心のチーム医療、②人間性豊かな医療人の育成、③一般的な外科疾患から専門的な外科疾患まで網羅する広範囲での臨床外科の実践、④地域医療への積極的参加と連携強化、をおこなっています。

総合外科の実践とそれを継承する医療人の育成に取り組み、地域に貢献できる臨床を総合外科学講座の運営の柱とし、専門性を高めるよりむしろ多くの疾患に対応できるような診療、すなわち高度専門医療より様々な疾患に対応できる広範囲な総合医療を優先した総合外科を目指し、次に専門性の強化を図っています。

外科系全般を扱うことを前提に、臨床医教育をおこなうこととし、関連する診療科から必要な人材をそろえ、応急処置から全身管理までを含む医療の実践と教育をおこなっています。周辺医療機関との連携を取りながら、既存の診療科と協力し専門性の強化を図り、特に5大がんのうち、肝がん・乳がん・胃がん・大腸がんについては、短期間に診療体制を整備しました。乳がんに関しては、新たな外来診療枠を開設しています。

内視鏡外科手術の充実は最重要課題の一つであることから、多くの外科系に共通する技術として、希望する若手外科医師や研修医には、教育研修システムに組み込み手術手技を体験させ、東近江地域における内視鏡外科の発展、普及を図るため、適応疾患の拡大をおこなってきました。各診療科横断的な診療を展開することから、多岐にわたる広い知識と技術を要求されます。このため、これに興味を持ち、やりがいを見出す研修医が増加するようスキルスラボの整備もおこないました。

専門性を重視しつつ総合外科の実践をおこなえる魅力ある講座運営をおこなうとともに、医療安全に関する研究教育の周知徹底と、地域住民から信頼される医療スタッフの育成に努めています。また、あらゆる年代の総合外科医が更なるスキルアップと充実感を満喫できる診療・教育・研修体制の構築と運営をおこなってきました。

地域の医療機関が一体となる研修システムを構築し、大学病院や都市部の臨床研修医療機関ではできない特色ある教育・研修を実践し、地域住民から信頼される医療を実践しています。立命館大学情報理工学部との連携により、情報通信技術を利用し滋賀医科大学医学部附属病院と直結した「リアルタイムカンファレンス」や「超臨場感手術システム」の臨床応用を検討し、講座スタッフや研修医のモチベーションを高めるように環境を整えました。麻酔科診療の安定化をめざし、総合外科学講座内に客員准教授をおき教育研究臨床の充実を図っています。

以上、東近江総合医療センターの実績と総合外科学講座・総合内科学講座の実績を紹介いたしました。今後さらなる地域医療の整備を進めていく予定です。

インフォメーション

第40回滋賀医科大学若鮎祭 収支決算報告書

第40回滋賀医科大学若鮎祭　実行委員会

【収入】　（単位：円）

執行部	近江八幡市蒲生郡医師会	¥30,000	¥5,060,000
	守山野洲医師会	¥20,000	
	草津栗東医師会	¥30,000	
	東近江医師会	¥10,000	
	湖北医師会	¥10,000	
	彦根医師会	¥10,000	
	滋賀県医師会	¥50,000	
	滋賀医科大学医師会	¥60,000	
	和仁会	¥200,000	
	滋賀医科大学医学科後援会	¥300,000	
	滋賀医科大学看護科後援会	¥100,000	
	滋賀医科大学同窓会「湖医会」	¥200,000	
	学内寄付	¥845,000	
	滋賀医科大学学生自治会	¥1,600,000	
	滋賀医科大学体育会	¥1,000,000	
	滋賀医科大学文化会	¥400,000	
	学外寄付	¥190,000	
	食券売上	¥5,000	
総務局	模擬店出店料	¥427,000	¥440,000
	名札回収保証金	¥13,000	
広告局	パンフレット広告掲載料	¥2,119,784	¥2,119,784
広報局	学祭バーカー売上	¥1,507,500	¥1,507,500
企画局	縁日・フリーマーケット売上	¥98,650	¥129,150
	講義室企画売上	¥6,900	
	食堂企画売上	¥0	
	募金	¥20,000	
	スポーツ大会参加費	¥3,600	
その他	預金利息		
合計			¥9,256,746
前年度繰越金			¥3,150,622
総計			¥12,407,368

【支出】　（単位：円）

執行部	スタッフジャンパー			¥44,570	¥281,646
	文具・事務用品・コピー			¥33,975	
	郵送・通信			¥11,462	
	保険料			¥58,640	
	クリーニング費			¥18,323	
	着ぐるみ・写真撮影			¥114,676	
総務局	文具・事務用品・コピー			¥9,082	¥112,382
	衛生関連			¥58,679	
	物品・設備			¥1,745	
	テント三方幕			¥42,876	
広告局	文具・事務用品・コピー			¥29,100	¥190,774
	郵送・通信			¥157,530	
	交通費			¥2,214	
	振込手数料			¥1,930	
広報局	文具・事務用品・コピー			¥21,544	¥1,738,121
	学祭バーカー			¥966,671	
	パンフレット			¥665,280	
	学祭 PR 活動費			¥74,937	
	看板製作費			¥9,689	
企画局	文具・事務用品・コピー			¥7,782	¥906,540
	イベント（食堂）	雑貨	¥5,395	¥64,487	
		占い	¥12,720		
		アロマキャンドル	¥6,372		
		お弁当	¥40,000		
	イベント（駐車場）	雑貨	¥3,245	¥458,240	
		移動動物園	¥341,280		
		スタンプラリー	¥72,089		
		ラジコンカーレース	¥17,155		
		昭和の遊び	¥24,471		
	イベント（講演会）	文具・事務用品	¥10,906	¥221,195	
		ポスター代	¥18,381		
		講演料（水谷先生）	¥79,000		
		講演料（山中先生）	¥77,060		
		懇親会（浅井先生）	¥20,385		
		お菓子	¥15,463		
	イベント（講義室）	ものづくり教室		¥49,551	
	イベント（体育館・グラウンド）	文具・事務用品	¥6,483	¥77,800	
		ポップコーン	¥21,400		
		縁日	¥37,119		
		その他	¥12,798		
	募金			¥20,000	
	お弁当			¥7,485	
ステージ局	文具・事務用品・コピー・雑費			¥2,934	¥5,636,434
	ステージ設営			¥2,484,540	
	特殊効果			¥490,000	
	電気工事費			¥734,400	
	電気燃料費			¥54,478	
	フィナーレ班	電飾・工作材料	¥300,225	¥318,263	
		発電機・燃料費	¥18,038		
	映像班			¥40,280	
	交渉班（接待）・お弁当代			¥58,921	
	吉本芸人			¥1,300,000	
	ミスコン			¥25,875	
	KOE			¥7,788	
	フルーレット出演料			¥75,924	
	その他企画（Sub ステージ）	尾崎豊伝説	¥928	¥21,229	
		HERO の本音	¥3,456		
		あだ名名人	¥2,030		
		断髪式	¥1,728		
		太陽にほえ王	¥837		
		大人塾	¥1,922		
		鳥人間コンテスト	¥320		
		少数民族サミット	¥1,553		
		指揮っチャオ	¥1,028		
		モナ似ザ	¥6,264		
		江戸っ子選手権	¥1,163		
	その他企画（Main ステージ）	HERO 選手権	¥1,892	¥21,802	
		我らがエリート調査団	¥2,287		
		リアクション王	¥1,896		
		想いよ届け、愛しの君へ。	¥1,987		
		滋賀医大裁判所	¥2,174		
		子供塾	¥11,566		
合計					¥8,865,897
次年度繰越金					¥3,541,471
総計					¥12,407,368

●監査報告

第40回若鮎祭の会計監査を行ったところ、適正かつ正確に運営されていたことを報告いたします。

第39回　滋賀医科大学若鮎祭
実行委員長　　林家　俊和

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
勢多だより
MARCH 27, 2015

編 集 後 記

今年度学位を授与された学部生・大学院生の皆さん、卒業・修了おめでとうございます。皆さんがご存じのとおり、滋賀医科大学の英文表記はSHIGA MEDICAL SCHOOLではなく、SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCEです。その理由は、大学院を有するからという点に加えて、基礎および臨床の医学教育はもちろんのこと教養教育をも重視するという本学開学時の理念にあると思います。こうした理念のもとに皆さんを医療人の卵として育んでくださった木村隆英先生、工藤基先生が今年度ご退官されます。滋賀医科大学を巣立つ皆さんが開学の精神と先生方の思いを忘れることなく、活躍してくださることを願っています。

編集委員長　宮松　直美

（勢多だよりの由来）

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢（いきおい）が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

（題字は、故 脇坂行一初代学長による）

勢多だより　No. 101
発行年月日：平成27年3月27日
編集：「勢多だより」編集担当者会議
発行：滋賀医科大学広報委員会

滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動ーこれは人々の医への期待である。外に向かって中心から一隅を照らす光の波動ーこれは人々の期待に返す答えである。」